沼津のみち

人やものを移動させるための交通空間であるとともに、人々が集い、語らうといった日常の生活空間でもある「みち」。長い歴史の中で、形や役割を変え、その地域にあった街並みを作り出しています。

沼津市では昔から日本の骨格を担う主要道路が横断し、日本の経済を支える一方で、市民の皆さんから愛され、馴染み深い生活道路もたくさんあります。

今回の特集では、沼津のみちの歴史を紐解き、市民の皆さんから愛着を持たれ、憩いの空間として利用される様々な沼津のみちを紹介します。

旧東海道の六軒町付近の写真と同じ場所を写した昭和6年の写真（東向き）

沼津市明治史料館所蔵

歴史と文化の道
東海道

古くから沼津市を東西に横断する東海道。日本の大動脈として政治や文化の中心を繋いでいたと同時に沼津市がまちとして成り立つ大きな要因でもあったと言えます。

東海道という名称は大宝律令（701年）で制定された地域名でしたが、後にこれらの地域を経由し、貫通する道路も指すようになりました。

江戸時代に入ると徳川氏の本城がある江戸と朝廷のある京都や経済の中心であった大坂との情報伝達が迅速に行えるよう、街道沿いにある各宿場には、公用の書状や荷物を次の宿場まで届けるため、人や馬を配置する宿駅伝馬制度が敷かれ、これにより近世の東海道が成立したとされています。

その後、参勤交代の大名行列などにより人の往来が増え、街道や宿場施設の整備が進む一方、軍事上の目的から各地には関所などが設けられました。やがて、世の中が平和になるにしたがい、政治・軍事の道から多くの人々が旅などで行き交う庶民の道へと変わっていきます。

この頃、沼津を通る東海道は、木瀬川から市街地へ入り、駿河湾沿岸を原方面へ抜けています。宿場は2カ所設けられており、全国から多くの人が訪れ、賑わいを見せていたことがうかがえます。

江戸から12番目の沼津宿では、慶長19年（1619年）に廃城となった三枚橋城と狩野川との間を東海道が通り、本町付近を中心に宿の機能が集中していました。

沼津宿を西に一里半（約6㎞）行くと13番目の原宿があります。街道沿いに町が発展した原宿には寺社が多く、旅人の宿としても使われていたそうです。今も原には当時からある神社仏閣や間口の狭い敷地など昔の面影を残しています。

現在は、県道東柏原沼津線の西間門交差点から植田までを旧東海道と呼ぶほか、市内各所にも当時の様子をうかがうことができる痕跡が多く残され、今に伝えられています。

東海道は、交通事情の変化などに伴いその形態や役割は変わりましたが、沼津市の歴史や文化の発展に大きく影響を与えていた「みち」と言えます。

歌川広重が描いた東海道五十三次（上段）沼津 黄昏図（下段）原「浮世絵に描かれた沼津」より転載

人々に領域を知らせるため街道の傍らに建てられた沼津藩領西境の榜示杭（西間門 八幡宮境内）

街道と歩む老舗

髙嶋酒造株式会社
代表取締役　髙嶋一孝さん

東海道沿いの原宿場町で江戸後期（文化元年・1804年）から商いを続けている髙嶋酒造。沼津の地酒、白隠正宗の醸造元として多くの人に知られています。白隠正宗の酒銘には、明治17年に勅使として松蔭寺を訪れた山岡鉄舟が、出された酒の旨さに原宿で生まれた白隠禅師に因んで「白隠正宗（はくいんまさむね）」と銘名したという逸話があります。

代表を務める髙嶋さんは「酒蔵というと米どころにあるのが一般的ですが、うちは東海道の賑わいとともに育った蔵なんです。宿場町として多くの旅人や要人が宿や寺社に立ち寄ったので、おもてなしのお酒を振る舞う機会が多かったことから、お酒を造るようになったんですよ」と教えてくれました。

道路整備が進むと、箱根や伊豆方面へ出荷をするようになり、今では沼津の地酒を国外にも届けているそうです。

江戸時代から続く髙嶋酒造。その営みは東海道とともに歩んできたことがうかがえます。

地域を結ぶ
根方街道

愛鷹山南麓（なんろく）の集落を結び、黄瀬川流域から富士市吉原まで続いている道路がいわゆる根方街道。「根方」は山裾を意味し、海岸部を示す「浦方」に対置する言葉です。昔の街道は愛鷹山の尾根の先端をかすめながら集落内に入り、折れ曲がりを繰り返しながら隣の集落へと続いていました。

現在では、自動車がようやく相互通行できる道路として、門池、大岡、金岡、愛鷹、浮島の各地区を結び、概（おおむ）ね旧集落の南側をかすめるように続いています。街道沿いには道祖神など石造物が多く残っており、古道の面影を残しています。

バスやトラックとすれ違えば速度を落とし、笑顔で譲り合う、地域の皆さんに愛着を持たれた根方街道は、今も昔も生活道路として重要な役割を果たしています。

道の守り神である道祖神が数多く残っています（東椎路）